俳聖松尾芭蕉の門人になった尾張刀工の二代出羽守氏雲

牧野克昭

初代長門守藤原氏雲（慶長）は、美濃出身で尾張に出てはじめは古渡に住み、のちに旧東海道五十三次の宿場の鳴海に移住した、尾府三作と謂われる氏房一門の刀工である。

熱田神宮に、奉納刀で愛知県指定文化財の重ねの厚い豪壮な脇指がある。

脇差　銘　長門守氏雲　尾州旧渡之住

二代出羽守氏雲（元禄）は、鳴海根古屋町に住む、また平部山にも住むともいう（鍛冶場のことか）。姓は岡島氏、名は庄三郎・佐助ともいう。

また、芭蕉の門人で鳴海六蕉門の一人、俳名を「自笑」と名乗っている。

私の地元の名古屋市緑区には、旧東海道沿いの三王山（織田信長が桶狭間の戦いの頃に造られた丹下砦跡の付近ある）の千句塚公園内に「芭蕉千鳥塚」がある。（写真1）（写真 3）（写真 4）

この塚は、貞享四年（一六八七）冬十一月、寺島安信宅での歌仙「星崎の闇を見よと啼く千鳥」の巻が、満尾した記念に建てたもので、文字は芭蕉の筆、裏面には連の名、側面には興行の年月が刻んである。これは松尾芭蕉翁が存命中に建てられた唯一の翁塚であり、俳文学史上希有の遺跡といってよい。昭和五二年（一九七七）名古屋市史跡に指定された。（名古屋市教育委員会の案内標識よる）（写真 2）

この塚の碑表には「千鳥塚」下に「武城江東散人　芭蕉桃青」と刻まれ、碑陰には「千句塚」と鳴海蕉門六人の名、「知足軒寂照」「寺島業言」「寺島安信」「出羽守自笑（氏雲）」「児玉重辰」「沙門如風」が刻まれている。

側面には「貞享四丁卯十一月口日」と刻してある。

桃青は松尾芭蕉、寂照は下郷金右衛門で屋号を千代倉と称する豪商、業言は枡屋伊右衛門で鳴海宿の本陣職を務める、安信は本陣職の業言の弟、重辰は鳴海宿の問屋職を務める、如風は鳴海作町にある如意寺住職の文英和尚のことである。

出羽守自笑（氏雲）は、この興行の時の句に「築山のなだれに梅を植かけて　自笑」などがある。

因みに尾張は幕末まで俳諧が盛んであり、刀工も俳諧を嗜んだ事は熱田神宮に奉納した「熱田万句」にもある。

鳴海宿は着物の鳴海・有松絞りが有名であり、鳴海代官所が置かれ、禅宗等の寺も多くあり、経済的にも刀工が仕事を営む環境があったと思われる。

自笑は正徳三年正月七日歿し、鳴海作町の如意寺に葬られ、法名「了照」。

当地の成海神社（神剣「草薙剣」を奉斎する熱田神宮の別宮）は日本武尊東征の縁に由る祭神と、尊にまつわる数々の伝承が残っている。また初代と二代氏雲の刀が奉納されている。

【奉納刀】

一、 脇指 銘 長門守氏雲

（長さ一尺四寸六分）

一、 刀 銘 出羽守氏雲

（長さ二尺三寸一分）

【参考文献】

一、名古屋区史シリーズ「緑区の歴史」

二、尾張刀工譜

三、尾張の名刀展 名古屋市博物館

四、熱田神宮の宝刀 熱田神宮

千句塚公園入り口（写真 1）

千鳥塚案内標識（写真 2）

碑表面:千鳥塚(写真 3)

碑陰面:千句塚(写真 4)